



神戸スタンダード制定の経緯と意図：全学ディプロマ・ポリシーとの関係に注目して（〔特集〕 教育研究活動の質保証と改善に資する教学マネジメントを目指して）

近田，政博

(Citation)

大學教育研究, 31:25-43

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481696>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481696>



神戸スタンダード制定の経緯と意図 —全学ディプロマ・ポリシーとの関係に注目して—

The Background and Making of ‘Kobe Standards’ : In Relation to the Diploma Policies of Kobe University

近田 政博（神戸大学 大学教育推進機構 教授）

要旨

神戸大学の学士課程には、全学ディプロマ・ポリシー（以下 DP）とは別に「神戸スタンダード」という独自の教育目標が存在し、この達成度を全学委員会で把握する仕組みになっている。本稿では、全学 DP と神戸スタンダードがなぜ並立するに至ったのか、どのような関係性になっているのかを作成当時の WG の議事メモと資料を確認しながら検証した。

その結果、次の点が明らかとなった。①第 3 期の教育改革では神戸大学らしさを対外的にアピールする必要に迫られていた。②神戸スタンダードを旧全学 DP と整合性をとることは可能だと WG では認識されていた。③神戸スタンダードは学士課程教育改革の全体像を表す概念から、教養教育の目標へと縮小された。④神戸スタンダードの作成に際しては、旧全学 DP の表現を下敷きにしつつも、「協働」「複眼的」「国際性」などの独自色を打ち出そうとする工夫がみられた。⑤旧全学 DP を見直す際には、神戸スタンダードのキーワードを活用しながら、新たな項目を追加して現行の全学 DP が作成された。

ただし、全学 DP と神戸スタンダードが並立することによる構造的な問題点も発生している。学生や教職員にとってわかりやすく無理のない形に改善することが望まれる。

1. はじめに

神戸大学では、学士課程における全学部の学生が履修する教養教育において、卒業までに身につけるべき共通の能力を「神戸スタンダード」として定め（以下、引用部分を除きカッコ外す）、これに基づいて教養教育のカリキュラムを提供している。神戸スタンダードは、「複眼的に思考する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」「協働して実践する能力」の 3 点からなる。現在の神戸大学においては教職員と学生の双方にとって、この神戸スタンダードが一定程度普及している状態にある。

ところで、全学で定めたディプロマ・ポリシー（以下、全学 DP）と神戸スタンダードの中身を比較すると、これらは完全な別物ではなく、いくつか共通する要素もみられる。神戸大学ではなぜこの両者が並存する仕組みになっているのだろうか。すでに全学 DP が存在するにもかかわらず、神戸スタンダードを策定したのはなぜなのか、どのような経緯で策定されたのか、神戸スタンダードと全学 DP の関係性はどうか。

結論を先に言うならば、神戸大学の教学方針の実質的な合意形成を行う大学教育推進委員会では、神戸スタンダードを 2014～2015 年度にかけて策定した一方で（2016 年度から導入）、2016 年～2019 年度にかけては旧 DP とカリキュラム・ポリシー（以下 CP）の見直しを断続的に行ってきた。そして、作成したばかりの神戸スタンダードの表現を活用する形で、各学部・研究科が定める DP と CP を見直す方針をとった。それが結果的に、神戸スタンダードと全学 DP という類似する教育目標が並存する形をもたらした。本稿の目的は、神戸大学の教育改革がなぜそういう独特な経緯をたどったのかを検証し、今後の教育改革のための知見を得ることにある。

神戸スタンダード作成の中心となったのは、2013 年 11 月に大学教育推進委員会に設置された教育改革検討ワーキンググループ（以下 WG）であった。本稿では同 WG の議事メモ及び資料を点検することによって、神戸スタンダード作成の経緯と意図を明らかにしたい。同時に、教学面の実質的な意思決定機関である大学教育推進委員会の資料を点検することで、DP と CP の見直しプロセスを振り返り、そこに神戸スタンダードがどのように関係しているのかを確認したい。

2. 神戸スタンダードと全学 DP

最初に神戸大学が定めた神戸スタンダードと現行の全学 DP の内容について確認しよう。神戸スタンダードの 3 つの能力は、それぞれ次のように定義されている。

- ・複眼的に思考する能力

専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通して複眼的なものの見方を身につける

- ・多様性と地球的課題を理解する能力

多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を理解する能力を身につける

- ・協働して実践する能力

専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え目標を追求し続ける力を身につける

この神戸スタンダードの理念に基づき、神戸大学では 1 年次と 2 年次を対象として基礎教養科目と総合教養科目を提供し、2 年次以上に対して高度教養科目を提供している。これらの科目の目標は次のように定義されている。

- ・基礎教養科目

自分が所属する専門分野以外の主要な学問分野について基本的な知識及び「ものの見方」を学び、理解する

- ・総合教養科目

多文化に対する理解を深め、多分野にまたがる課題を考え、対話型の講義を取り入れるなどの工夫により、複眼的なものの見方、課題発見力を養成する

- ・高度教養科目

専門の異なる学生が共通の課題について協働して解決方法を探ることにより、「分野融合」「文理融合」の意義、協働の大切さを学ぶ

以上の内容からわかるように、神戸スタンダードで定義する3つの能力のうち、「複眼的に思考する能力」の達成が基礎教養科目に、「多様性と地球的課題を理解する能力」の達成が総合教養科目に、「協働して実践する能力」の達成が高度教養科目に対応していることは明らかである。

ただし、注意すべきは、神戸大学には平成14年に制定された「教育憲章」が別途存在し、その目的は次のように、人間性、創造性、国際性、専門性という4つのキーワードで説明されていることである。

- ・人間性の教育：高い倫理性を有し、知性、理性及び感性の調和した教養豊かな人間の育成
- ・創造性の教育：伝統的な思考や方法を批判的に継承しつつ、自ら課題を設定し、創造的に解決できる能力を身につけた人間の育成
- ・国際性の教育：多様な価値観を尊重し、異文化に対する深い理解力を有し、コミュニケーション能力に優れた人間の育成
- ・専門性の教育：それぞれの職業や学問分野において指導的役割を担うことのできる、深い学識と高度な専門技能を備えた人間の育成

これらのキーワードは、全学のDPのなかに次のように具体的に表現されている。つまり、教育憲章と全学DPは垂直的な上下関係にある。

- ・人間性

- ・さまざまな場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力
- ・専門性や価値観を異にする人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力

- ・創造性

- ・他の学問分野の基本的なものの考え方を学び、自らの専門分野との違いを理解する力
- ・能動的に学び、新たな発想を生み出す力

- ・国際性

- ・複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力
- ・文化、思想、価値観の多様性を受容し、地球的課題を理解する力

- ・専門性

- ・それぞれの課程で身につける専門的能力は各学部・研究科が定める

上記のうち各学部・研究科に実質的に委ねられている「専門性」は、認証評価等で問われる教育課程別の DP 達成度の基盤をなしている。他方、「人間性」「創造性」「国際性」については、全学的な共通性が大きい設計となっている。これらは神戸スタンダードとは内容的に重複する要素もみられ、両者はいわば「似て非なる」関係にある。

3. 神戸スタンダード作成の経緯

3.1 基本構想の提示

同 WG が 2013 年 11 月に発足したときのメンバーは、大学教育推進機構の機構長（教育担当理事）、副機構長（全学共通教育部長¹）、大学教育推進部²副部長 2 名、グローバル教育部長³、これに四大学術系列（人文・人間科学系、社会科学系、生命・医学系、自然科学系）から大学教育推進委員会委員が 1 名ずつ加わり、さらに国際コミュニケーションセンター⁴長、企画評価室⁵、学務部長による 12 名体制であった。座長は機構長が担当し、毎週 1 回のペースで開催された⁶。WG 議事メモは発言内容が箇条書きに記載されているが、誰がその発言を行ったのかまでは明記されていない。実質的には、当時の藤田誠一機構長と大野隆副機構長が議論を主導したとみられる。

神戸大学において神戸スタンダードという言葉が登場したのは、WG 発足に先立つ 2013 年 10 月 17 日の部局長会議、および 11 月 7 日の大学教育推進委員会であった。これらの場で「神戸大学の教育改革ーグローバル人材が求められる社会への対応」が審議されている。その資料のなかに「神戸スタンダード（学士課程教育プログラム）」として、教養教育と専門教育の改革、入試改革に関するポンチ絵がある。神戸スタンダードとは特定の教育理念ではなく、カリキュラムや入試を包摂する学士課程教育の全体を指す概念として用いられた。

初回 WG は 11 月 7 日の大学教育推進委員会の終了後に開催された。冒頭では座長が当面の検討課題を説明し、2013 年度中に文科省に教育改革の概要を提示し、2014 年度のヒアリング対象に選んでもらえるようにしたいとの説明があった。当初の議論では、(学部・学

¹ 全学共通教育部は改組され、現在の教養教育院。全学共通教育部長は現在の教養教育院長に相当する。

² 現存せず。専任教員ポストは現在の大学教育推進機構大学教育研究センターに引き継がれている。

³ 現存せず。機能的には、現在の大学教育推進機構グローバル教育センター海外派遣教育部門長に近い。

⁴ 当時は独立したセンターであったが、現在は大学教育推進機構内のセンターとして改組。

⁵ 戦略企画室に改組。

⁶ 週 1 回開催というペースは、通常の WG と比較するとかなり頻繁であり、教育改革を進める上で、当時の教育担当理事がこの WG を重視していたことが窺える。

科別入試によらない)一括入試⁷、主専攻・副専攻制度、4学期制などが話題に上っている。第2回では「他大学の後追いではなく、神戸大学の特色を出したスタンダードを作ることが大切である」(11月14日)、第3回では「まずは文科省からの承認を得られるようなブレイクスルーが必要である」との発言があった(11月21日)。

この文科省からの承認とは、第2期の後半に文科省によって行われた国立大学の機能強化策のことを指す。これは各大学に特色ある取組を促して、選定された大学には運営費交付金を措置して第3期への弾みとするものであった。この施策ではとりわけ教員定員や学生定員の移動を伴う組織改革が求められた。神戸大学では科学技術イノベーション研究科や国際人間科学部の創設のみならず、このWGを通じて学士課程教育全体の改革の道筋をつけようとした⁸。すなわち、神戸スタンダードの発端は、第3期の準備段階としての国立大学機能強化に採択されるための戦略の一環であったと言える。

同年12月には、神戸大学のある理事が文部科学省に改革案を提示した際の文科省のコメントが紹介されている(第7回、同年12月19日)。これによると、「教育プログラム改革だけなのかという指摘があったとのことである。組織が大きく変更になったことを見せなければ、文部科学省としても財務省に対して説明がつかない」との説明が残されている。具体的には、「思い切った改革」「目新しさ」「組織イメージが大きく変化するようなスケジュール」「いかにして神戸大学の特徴を示すか」という指摘があったという。これらの点から、大胆な発想で神戸大学らしさをどう打ち出すかを検討する必要に迫られていたことがみてとれる。

2013年度の同WG議事メモを見る限りでは、カリキュラムの再編成とクォーター制に関する議論が中心を占めた。全学共通教育カリキュラムの再編については、第4回では『新』教養原論⁹「グローバル科目」という新しいカテゴリ別に具体的な科目名が列記され、全学共通教育部を改組した「グローバル共通教育院」(現在の教養教育院に相当)でこれらを提供するという案が示された(2013年11月28日)。第6回(12月12日)では、従来1・2年次を対象としてきた全学共通教育を、「グローバル共通教育院」が1年次から4年次にわたって提供する体制に変えること、『新』教養原論を第2クォーターから提供することで、当時の教養原論の割り当てに対する学生の不満を解消することなどが提案されている⁹。また、グローバル科目を「基礎グローバル科目」と「高度グローバル科目」に分けて、

⁷ しかし、第4回の冒頭で、このWGでは入試改革については当面議論しない方針となった。教育プログラムを固めることが先決との判断がなされた(2013年11月28日)。

⁸ 神戸大学の全学共通授業科目は全学出動体制が謳われてきたにもかかわらず、実際には部局間で授業負担に偏りがあることが長年指摘されてきたので、組織改革の観点からも重視とみなされた。

⁹ 2015年度までの旧カリキュラムでは、旧教養原論は1年前期から履修する仕組みだったので、新入生は特定授業に自動割当となっており、希望する科目を選択できなかったことで不満が大きかった。また、旧教養原論はテーマ別科目が多かったことから、低年次には各学問分野の基本的なディシプリンを教えるべきではないかという問題意識が当時あった。現行のカリキュラムは2016年度から施行されている。

高年次において「高度グローバル科目」を履修する仕組みが提案された。つまり、神戸スタンダードという理念よりも、まずは学士課程のカリキュラム全体をどう再編するかという方法論の議論が先行していたのである。

2014 年度になると¹⁰、次のような発言がみられた（以下、全文ママ）。

- ・「専門性は学部毎になるが、それとは別に神戸大学として、全学的なグローバル教育を強化するというコンセプトで教養教育の改革を検討しており、グローバルな舞台で活躍する人材として、学生がこのような能力をこのような水準で身につけたと示したい」（第 1 回、2014 年 4 月 3 日）
- ・「神戸スタンダードとして、新教養原論でコアカリキュラムを設定し、他分野においてそれぞれのディシプリンに沿ったある程度の知識を習得させる。さらに、基礎グローバル科目で異分野・異文化理解などを学び、アクティブ・ラーニングなどの高度グローバル科目により学びを深めるということになる」（第 2 回、2014 年 4 月 10 日）
- ・「尖った一部の学生は各部局の尖ったプログラムとして（ママ）留学に行かせたい。神戸スタンダードとしては、あくまでも全学生の底上げを考えたい」（同上）

3.2 制度設計をめぐる議論

神戸スタンダードについての集中的審議が初めて本格的に行われたのは、2014 年 4 月 17 日の第 3 回 WG であった。これまでの議論をふまえて藤田機構長と学務課で作成した資料「学士力の強化に向けた神戸スタンダードの確立（たたき台）」が示され、その特徴や目標設定に関する議論が WG で行われた。ここではじめて神戸スタンダードの理念として次の 5 点がたたき台として示された。これらが現在の神戸スタンダードの母体となったものである。

- ・専門分野と異なる学問分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通じて複眼的思考の基礎が身についている
- ・変動する国際状況の中で、日本文化と外国文化の理解に基づき歴史や文化を相対的に思考する能力が身についている
- ・複数の学問分野にまたがる社会問題を理解することを通じて他の学問分野との複眼的思考の重要性が理解できる
- ・自らの専門分野を理解した上で、他の分野の学生とのディスカッションを通じて複雑な社会問題の解決能力が身についている
- ・外国語（英語）で自分が意図する内容を伝達すると同時に相手の主張も理解し、協働作業を通じて日常の諸問題に対処することができる

¹⁰ 筆者自身は、2014 年 4 月に大学教育推進機構の大学教育支援研究推進室の教授として着任し、着任と同時に同 WG のメンバーに加えられた。

気になるのは、本 WG はこの神戸スタンダード案を前述の教育憲章や DP とどのように整合性をつけるのかという点である。4 月 17 日の WG では、次のようなやりとりが記録されている。以下のやりとりからは、WG が神戸スタンダードの策定と既存の教育憲章や DP は整合性において問題はないと認識していたことがみてとれる。

- ・「神戸スタンダード」は、(中略)全学共通教育において専門性とは別に身に付けさせようということになるため、専門教育の DP との整合性は特に問題はない(傍線筆者)。また、教育憲章の教育目的との関係については検討が必要である。
- ・「神戸スタンダード」を各学部を横に貫く全学で標準的なスタンダードと考えているのであれば、教育憲章の内の専門性以外の人間性、国際性、創造性と関連付けるような形で定めれば整合性は取れると思われる(傍線筆者)。
- ・「神戸スタンダード」は全学生が身に付けるべき基準としたい。
- ・何をもって「神戸スタンダード」とするのかを決めなければならない。4 年間を通じて全学共通教育を充実させ、一方で専門教育も 4 年間かけて充実させることで両方の能力を身に付けた人材を育成する点が、これまでの教育内容とは異なる点となる。
- ・これまで教養教育と専門教育は楔形にするとしていたが、高学年になると楔型にはなっていなかった。よってナンバリングを行い、高度グローバル科目を高学年次にしか履修できない科目とすることで、真の意味での楔型とすることが今回の改革の特徴となる。
- ・「神戸大学スタンダード」及び「神戸スタンダード」については企画部の中でも正式な名称や、明確な定義はまだ定まっていない。

さらに 2014 年 5 月 1 日の WG では、次のようなやりとりが記録されている。

- ・4 月 30 日開催の企画評価室会議に出席した際に、神戸スタンダードはグローバル共通教育院の理念としてはどうかと提案した。高度な専門性については各学部が提供しており、従前どおりで良いと考える。グローバル共通教育院によるスタンダードの上に、各学部による専門性を学生がそれぞれ身に付けると考えれば良い。
- ・(前略)全学共通教育部分のみを神戸スタンダードとしても、そのスタンダードと専門教育が有機的に結合していると言えるため特に問題はないと考えている。
- ・学士課程の専門教育の改革については検討がなされておらず、「神戸スタンダード」に専門性を加えることには抵抗がある。文部科学省から専門教育はどう変わるのか質問があった際に回答することができない。
- ・(前略)「高度な専門性」はスタンダードに含める必要はないのではないか。専門性を入れない方がスタンダードとしては自然である。

- ・(前略)「高度な専門性」は外すことにする。また、「神戸大学スタンダード」ではなく、「神戸スタンダード」という言葉を用いることとする。

注目すべきは、この時点で神戸スタンダードを学士課程教育全体ではなく、グローバル教養教育院が提供する全学共通授業科目に限定する方針が決まったことである。しかしながら、6月26日のWGでは再び次のようなやりとりがみられた。

- ・神戸スタンダードと教育憲章やDPとの関係性はどうか。
- ・神戸スタンダードと教育憲章との関係については既に本WGで検討したのではないか。教育憲章の4つの教育目標¹¹との関係を踏まえて神戸スタンダードについて検討したはずである。
- ・神戸スタンダードと教育憲章との関係について検討は行ったが、明確に文章としては残されていない。神戸スタンダードに専門教育を含むのか、共通教育だけのものにするのかも明確になっていない。
- ・神戸スタンダードはDPよりも上位規程として位置付けられるのか。神戸スタンダードはDPに影響を及ぼすのか。神戸スタンダードの実質化のためにはDPについても検討しなおす必要があるのではないか。
- ・DPは教育憲章の中の教育目標¹²との関係で規定しているため、神戸スタンダードを設定してもDPには影響はないのではないかと。DPを見直すかどうかについては後に検討すべきであって今検討すべきではないと考える(傍線筆者)。

これらのやりとりからは、2014年6月時点では、神戸スタンダード、教育憲章、DPの三者の関係性についての理解がWG内でも揺らいでいた様子がうかがえる。提案者である機構長と副機構長の側は、神戸スタンダードとDPの関係に齟齬はないので、DPを見直す必要性はないと認識していたことが読みとれる。なお、以後はこの三者の関係性について審議した記録は残っていない。

2014年9月1日のWGでは、次のような補足的なやりとりが記録されている。6月に議論した内容を何度も念押ししていることがみてとれる。

- ・「神戸大学スタンダード」では弱いように思われるため、「神戸スタンダード」という名称を使用しているが、この名称で良いか十分な検討はしていない。
- ・現在、各学部ではDPを定めているが、全学共通教育授業科目の目標が曖昧であるため、今回、神戸スタンダードとして本学の教養教育の目的を示す(傍線筆者)ということが、神戸スタンダードを定義する趣旨である。

¹¹ 正確には教育目的。

¹² 正確には教育目的。

・「神戸スタンダード」は教養教育の DP のような位置づけ（傍線筆者）であり、それと専門教育の DP を融合させて様々な人材を育成するということにしたい（後略）

3.3 小括

以上の議事メモから明らかになった特徴を表 1 にまとめた。ここからは、①第 3 期（2016 年度～2021 年度）を迎えるにあたり、中心議題として学士課程教育改革が俎上にあり、その一環として神戸スタンダードという包括的な概念が登場したこと、②当初は組織体制や提供科目の議論が先行したこと、③「神戸スタンダード」に専門性の部分を含めなければ、教育憲章や旧 DP と整合性をとることが可能だと認識されていたこと、④議論を踏まえながら神戸スタンダードを（全学共通授業科目から導入科目、外国語科目、共通専門基礎科目等を除く）教養教育¹³の目標として定義する方向に収斂していったことが読みとれる。

表 1 神戸スタンダードの作成経緯

日時	審議した会議・委員会	新しい方針
2013 年 10 月 17 日 2013 年 11 月 7 日	部局長会議 大学教育推進委員会	・「神戸スタンダード（学士課程教育プログラム）」という表現で初出
2013 年 11 月 28 日	教育改革検討 WG	・『『新』教養原論』、「グローバル科目」、「グローバル共通教育院」設置の提案
2013 年 12 月 12 日	教育改革検討 WG	・グローバル科目を「基礎グローバル科目」と「高度グローバル科目」に分ける提案
2014 年 4 月 17 日	教育改革検討 WG	・神戸スタンダード理念のたたき台が箇条書きで 5 点示される ・神戸スタンダード作成と教育憲章や DP と整合性をとることは可能との認識
2014 年 5 月 1 日	教育改革検討 WG	・神戸スタンダードから専門教育を外す ・名称を神戸スタンダードに確定する（「神戸大学スタンダード」ではなく）
2014 年 9 月 1 日	教育改革検討 WG	神戸スタンダードを教養教育に限定する
2015 年 7 月	大学教育推進委員会	神戸スタンダード承認
2015 年 9 月	部局長会議、教育研究評議会	神戸スタンダード承認
2016 年 4 月		神戸スタンダード導入

¹³ WG の発言では、「共通教育」と「教養教育」という 2 種類の単語がたびたび曖昧に用いられている。神戸大学において前者は正確には「全学共通授業科目」である。後者は旧「教養原論」の再編を指し、「全学共通授業科目」から外国語科目、共通専門基礎科目、導入教育、情報科目等を除いたものになる。したがって、射程の大きさで言えば、全学共通授業科目＞教養教育となる。

このうち本稿にとって特に重要な意味をもつのは③である。本 WG が 2014 年度～2015 年度にわたり計 48 回開催されたにもかかわらず、③の問題について本格的に議論したのは 2015 年 4 月～6 月にわたる数回のみであった。このことから、当時の WG の課題が 4 学期制（のちの 2 学期クォーター制）、カリキュラム改革、制度改革など広範にわたったので、教育憲章や DP との整合性という抽象的な議論で、教育改革の基軸となる神戸スタンダードの策定が座礁してしまうことを機構長、副機構長側が懸念したのではないかと筆者は推察する。大学全体として神戸スタンダードが公的に承認されたのは 1 年後の 2015 年 7 月～9 月であり、導入は 2016 年 4 月であった。

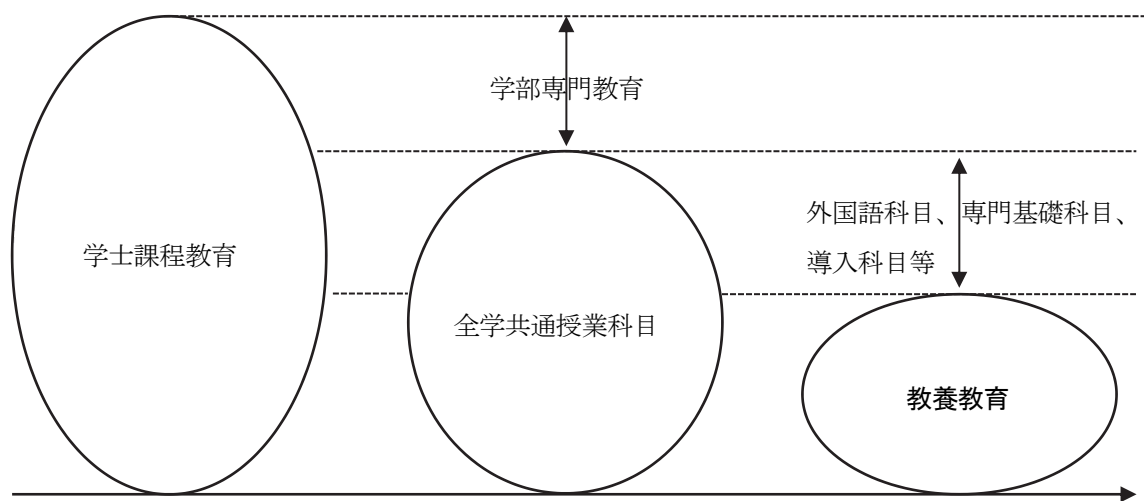


図1 神戸スタンダードの射程に関する議論の変遷

図1は神戸スタンダードの射程に関する議論の変遷を図式化したものである。横軸は時間軸、縦軸は射程の広さを示している。神戸スタンダードが当初は学士課程教育全体を対象としていたものの、やがて学部専門教育を除いた全学共通授業科目へと狭まり、さらに外国語科目や専門基礎科目、導入教育（情報基礎、初年次セミナー）などを除いた教養教育（旧教養原論：図1の太字ゴシック部分）へと限定されることになった。各学部にはすでに個別のDPが存在し、さらに外国語教育等は独自の課題を抱えていた。そこで当時の機構長と副機構長は、本部側で直接的にハンドリングできる教養教育の再編を学士課程教育改革の中核に据えようと考えたものと思われる。こうして、神戸スタンダードの「複眼的に思考する能力」は現在の基礎教養科目に、「多様性と地球的課題を理解する能力」は総合教養科目に、「協働して実践する能力」は高度教養科目として紐付けられたのである。

なお、神戸スタンダードと第3期中期計画との関係性について補足しておきたい。神戸大学の第3期中期計画には神戸スタンダードという単語は出てこないが、2020年に作成さ

れた第3期の「中期目標の達成状況報告書」にはこの単語が数多くみられる。特に、中期計画 1-1-1-1 の実施状況の箇所に詳述されており¹⁴、各種アンケート等を通じて、すべての学生が「神戸スタンダード」の達成度を自己点検する仕組みを整備したと説明されている。

では、なぜ中期計画自体には神戸スタンダードという単語が登場しないのに、後に作成された達成状況報告書には頻出するのだろうか。これは複数の理由が考えられる。第一に、時間的に間に合わなかったことである。第3期中期目標・中期計画の検討は2014年秋に始まり、2015年6月に素案を文科省に提出し、修正や追記の上、2016年3月に確定した。このことと神戸スタンダードの全学合意過程（表1）はほぼ軌を一にしており、第3期中期目標・中期計画の素案段階で、審議中の神戸スタンダードについて盛り込むことは難しかったと考えられる。第二に、中期計画の用語として神戸スタンダードという固有名詞は学外者にわかりにくいため、ここには記載せず、後の報告書に詳述する方法がとられたものと推察する。

4. DP の見直し

神戸スタンダード策定をめぐる一連の経緯とは別に、2016年度～2019年度にかけて DP と CP の見直し作業を進めてきた。これは、第3期の機関別認証評価（神戸大学は2021年度に受審）において大学評価基準が一部改正され、DP と CP が整合性をもつこと、身につけるべき能力について具体的に記載することが求められるようになったことへの対応措置である。また、DP には「学生の進路先等社会における顕在・潜在ニーズに関する記述」を含むように各部局に見直しを依頼した。

2011年度末に策定された最初の神戸大学 DP は「人間性」、「創造性」、「国際性」、「専門性」の4要素で構成されていたが、「〇〇できる」という表現で統一されており、そのためどのような能力が必要となるのかについては明記していなかった。また、これらの能力と開講科目との対応関係が CP（2012年度策定）において不明瞭であった。これらの点を全学と各部局の両方で改訂する必要に迫られたのである。

この見直しプロセスでは、DP と CP を各部局単位ではなく学位プログラム（学位の種類）ごとに作成すること、学士課程だけでなく大学院課程についても作成すること、さらにそれぞれの英語版も作成する必要があった。このため各部局は、全学での方針策定→各部局への依頼→本部事務局でチェック→各部局に再修正の依頼、という作業に数年間にわたって断続的に取り組むことになった。

¹⁴ 第3期中期計画 1-1-1-1 「グローバルな視点で諸課題の解決に向け主体的に行動する実践型グローバル人材を育成するため、学士課程及び大学院課程教育におけるディプロマ・ポリシーを点検・見直し、学部・大学院一貫プログラムやダブル・ディグリー・プログラムを30コース以上に増加させるなど、国際通用力を有する質の高い教育を展開する。」

各部局に作成依頼するにあたっては、大学教育推進委員会では「三つのポリシー見直しのガイドライン」を用意した（2016 年 9 月 1 日）。同ガイドラインでは次のような方略が提示されている。すなわち、各 DP には「神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え」と明記し（傍線筆者）、当該学部・学科（研究科・専攻）の学生が卒業までに身につけるべき能力について列記する方法をとった。各部局は「専門性」を中心に記載する一方で、「人間性」、「創造性」、「国際性」に関しても、全学 DP を参考にしながら記載している¹⁵。各 CP においても、「人間性」、「創造性」、「国際性」に関する記載内容を全学部共通とし、全学 DP に準じる（傍線筆者）こととした。「専門性」は、「深い学識を涵養し、『専門性』を学生に身につけさせるため、以下の専門科目を開設する」とし、「○○の能力を身につけることができるよう○○科目を開設する」という表現で統一した。

5. 神戸スタンダードと DP の関係性

現在の神戸スタンダードと現 DP は上述のような経緯で作成された。作成された時系列順は、旧 DP→神戸スタンダード→現 DP である。これらに相互関係があるかどうか、使われている語句を比較することで、神戸スタンダードは旧 DP から影響を受けたのかどうか、現 DP は神戸スタンダードから影響を受けたのかどうか、という点を検証したい。

5.1 旧全学 DP と神戸スタンダードの比較

旧全学 DP と神戸スタンダードの関係性について表 2 にまとめた。矢印の方向や太さは旧全学 DP と神戸スタンダードの対応関係とその大きさを示している。両者の基本的な違いは、旧 DP は何ができるようになっていくことが望ましいのかという理想像を示しているのに対して、神戸スタンダードは理想の実現のためにどんな能力を身につけるべきかを表現しているという点である。

これによると、神戸スタンダードは旧全学 DP の「行動、思考、理解」といった動詞表現を継承しているように見受けられる。神戸スタンダードの「協働して実践する能力」は、旧全学 DP の人間性における「行動」という表現と類似している。「複眼的に思考する能力」は、旧全学 DP の創造性における「思考」という表現と共通している。「多様性と地球的課題を理解する能力」は、旧全学 DP の国際性における「理解」という表現と共通している。また、この能力では「価値観」や「文化」という表現も継承されている。

しかしながら、旧全学 DP の 3 要素と神戸スタンダードの 3 要素は、内容においては必ずしも完全一致していない。神戸スタンダードの「協働して実践する能力」と「複眼的に思考する能力」には、旧全学 DP の人間性と創造性の内容が表現を言い換える形で含まれていることが確認できる（該当箇所に点線）。

¹⁵ 各学部が定める DP の記載内容については、「人間性」「創造性」「国際性」をすべて網羅していないケースもある。

その一方で、神戸スタンダードでは新たなキーワードを設けている。それは、「協働」「複眼的」「地球的課題」であり、これらは第3期の学士課程教育改革において特に重視されていた要素である。つまり、神戸スタンダードは「行動、思考、理解」といった表現を旧全学 DP から継承しつつも、内容面においては新しい要素を盛り込んでいる。

表2 旧全学 DP と神戸スタンダードの関係性

旧全学 DP		神戸スタンダード	
人間性	豊かな教養と高い倫理性を身につけ、知性、理性及び感性が調和し、自立した社会人として <u>行動</u> できる。	協働して <u>実践</u> する能力	専門性や価値観を異にする人々と <u>協働</u> して課題解決にあたるチームワーク力と、困難を乗り越え <u>目標を追求し続ける</u> 力を身につける
創造性	伝統的な <u>思考</u> や方法を批判的に継承し、 <u>自ら課題を設定して</u> 創造的に解決できる。	<u>複眼的に思考</u> する能力	<u>専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方</u> を学ぶことを通して <u>複眼的なもの</u> の見方を身につける
国際性	<u>多様な価値観</u> を尊重し、 <u>異文化</u> のより深い <u>理解</u> に努め、優れたコミュニケーション能力を発揮できる。	<u>多様性と地球的課題を</u> 理解する能力	<u>多様な文化、思想、価値観</u> を受容するとともに、 <u>地球的課題を</u> 理解する能力を身につける
専門性	それぞれの職業や学問分野において指導的役割を担えるように、学士課程においては幅広い知識とそれを基盤とした専門的能力を、また大学院の各教育課程にあつては、深い学識と高度で卓越した専門的能力を備える。		

表注：矢印の方向や太さは旧全学 DP と神戸スタンダードの対応関係とその大きさを示す。

アンダーラインは次の意味を表す。

一重線：旧全学 DP と神戸スタンダードで共通性の高いと思われる箇所

点線：旧全学 DP と神戸スタンダードで部分的に共通性があると思われる箇所

網掛け：神戸スタンダードで新たに追加された箇所

5.2 神戸スタンダードと新全学 DP の比較

では、現全学 DP は神戸スタンダードから影響を受けたのかどうか。結論から言えば、両者の類似性は大きい。それは多くのキーワードが共通しているからである。神戸スタンダードの「協働して実践する能力」では「協働」「課題解決」「チームワーク力」が、「複眼的に思考する能力」では「専門分野以外の学問分野について基本的なものの考え方を学ぶこと」が、「多様性と地球的課題を理解する能力」では「多様な文化、思想、価値観を受容する」「地球的課題を理解する」が、ほぼそのまま現 DP に継承されていることがわかる。このため、矢印の幅が太くなっている。総じて言えば、神戸スタンダードの 3 要素と現全学 DP の 3 要素は、各要素の名称こそ異なるものの、中身においては類似性が大きいとみなしてよいだろう。

ただし現全学 DP の 3 要素の中には、神戸スタンダードに直結しない内容も書き込まれている。それらは、「人間性」における「さまざまな場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力」、「創造性」における「能動的に学び、新たな発想を生み出す力」、「国際性」における「複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力」である（網掛け部分）。葛城（2023）では、これら独自の内容については、各部局の CP やカリキュラム・マップに必ずしも十分に反映されていないことが指摘されている。

以上の点からわかったことは、神戸スタンダードを作成する際には旧全学 DP の表現を下敷きにしたものの、基本的には「協働」「複眼的」「地球的課題」などのキーワードを新機軸として打ち出そうと苦心した様子がうかがえることである。他方、現全学 DP を作成する際には、神戸スタンダードのキーワードをほぼそのまま活かしつつ、新たな項目を追加する方法をとったことがみてとれる。いずれの場合も、神戸スタンダードで打ち出した新機軸を重視する意図が読みとれる。

表3 神戸スタンダードと現全学 DP の関係性

神戸スタンダード		現全学 DP	
協働して実践する能力	専門性や価値観を異にする人々と <u>協働</u> して課題解決にあたる <u>チームワーク力</u> と、困難を乗り越え <u>目標を追求し続ける力</u> を身につける	人間性 豊かな教養と高い倫理性をそなえ、知性、理性及び感性が調和し、自立した社会人として行動できるようになるため、次の2つの能力を身につける。	・さまざまな場面において、状況を適切に把握し主体的に判断する力 ・専門性や価値観を異にする人々と <u>協働</u> して課題解決にあたる <u>チームワーク力</u>
複眼的に思考する能力	専門分野以外の学問分野について <u>基本的なものの考え方を学ぶこと</u> を通して複眼的なものの見方を身につける	創造性 伝統的な思考や方法を批判的に継承し、自ら課題を設定して創造的に解決できるようになるため、次の2つの能力を身につける。	・他の学問分野の <u>基本的なものの考え方</u> を学び、 <u>自らの専門分野との違いを理解する力</u> ・能動的に学び、新たな発想を生み出す力
多様性と地球的課題を理解する能力	<u>多様な文化、思想、価値観を受容する</u> とともに、 <u>地球的課題を理解する能力</u> を身につける	国際性 多様な価値観を尊重し、多文化社会のより深い理解に努め、優れたコミュニケーション能力を発揮できるようになるため、次の2つの能力を身につける。	・複数の言語で異なる文化の人々と意思を通じ合うことができる力 ・ <u>文化、思想、価値観の多様性を受容し、地球的課題を理解する力</u>
		専門性 ・それぞれの課程で身につける専門的能力は各学部・研究科が定める。	

表注：矢印の方向や太さは神戸スタンダードと現全学 DP の対応関係とその大きさを示す。

アンダーラインは次の意味を表す。

一重線：神戸スタンダードと現全学 DP で共通性が大きいと思われる箇所

点線：神戸スタンダードと現全学 DP で部分的に共通性があると思われる箇所

網掛け：現全学 DP で新たに追加された箇所

6. 得られた示唆

以上の考察により、次の点が明らかになった。

- ・第3期の教育改革に際して、神戸大学らしさを対外的にアピールする必要に迫られており、神戸スタンダードはグローバル教育を強化する一環として提案された。
- ・旧全学 DP と整合性をとることは可能だと WG では認識されていた。
- ・議論の過程で、神戸スタンダードは学士課程教育改革の全体像を表す概念から、教養教育の目標へと変化していった。
- ・神戸スタンダードを作成する際には、旧全学 DP の表現を下敷きにしつつも、独自色を打ち出そうとする工夫がみられた。
- ・現行の全学 DP を作成する際には、神戸スタンダードのキーワードをほぼそのまま活用しながら、新たな項目を追加する方法がとられた。

ここで、最初の疑問点に立ち戻りたい。すでに旧 DP があるのに、なぜ神戸スタンダードなるものを新たに作成する必要があったのか、という点である。旧 DP を修正すれば済むのではないかとも思える。議事メモから推察する限り、旧 DP の見直しは各学部・研究科の了解を必要とするため、合意形成に大きな労力と時間を要することが予想されたのではないかと思われる。神戸スタンダードの射程を教養教育の枠内に収めれば、各学部の専門性には抵触せず、既存の DP との整合性をとることは可能だと判断したものと推測できる。このように、神戸スタンダードは旧全学 DP とは切り離して作成されたのである。

もう一つの疑問点は、2016 年度以降、旧 DP を見直す際に、各学部が神戸スタンダードの表現を随所に取り入れたのはなぜかという点である。これは、大学教育推進委員会での「三つのポリシー見直しのガイドライン」において、「神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え」という共通前提が設定されたことが大きいと思われる。これによって各学部では「人間性」、「創造性」、「国際性」に関して独自性を出すことにかえって苦心し、各学部 DP において神戸スタンダードの表現を参考にせざるをえなかったのではないかと思われる。

旧 DP の見直し作業と並行して、全学評価・FD 委員会では神戸スタンダードを学生向けに周知する仕組みを整備してきた。すなわち、初年次セミナー共通教材や教務システムポータル「うりぼーポータル」を通じて学生に周知を図り、初年次セミナー共通教材、「学修の記録」アンケート、卒業時アンケートなどを通じて、神戸スタンダードの達成度を学士課程全体において継続的に自己評価させる仕組みを整備しつつあった¹⁶。これらの機会を通

¹⁶ なぜ全学 DP ではなく、神戸スタンダードを重視する施策をとったのだろうか。全学 DP の「専門性」は各学部によって異なるのに対し、神戸スタンダードは学士課程の全学生にとって共通であるので、この達成度を全学評価・FD 委員会では把握するのが適当であるという認識が、当時の教育担当理事、共通教育部長（その後身である国際教養教育院長）にあったからではないかと推測する。

じて、「協働」「複眼的」「地球的課題」という神戸スタンダードのキーワードは各部局の教員にもある程度普及しつつあったので、自学部の DP を見直す際に援用されたのではないかと推測する。

7. 残された課題

最後に、残された課題について触れておきたい。現時点において、全学 DP は神戸スタンダードにいくらかの肉付けをした「ほぼ相似形」になっている。裏返して言えば、神戸スタンダードは全学 DP のほぼ部分集合になっており、次のような問題が残されている。

第一は、神戸スタンダードと各学部 DP の両者では網羅されない授業科目が存在することである。具体的には、外国語科目、共通専門基礎科目、情報基礎などが該当する（初年次セミナーは学部専門科目として学部 DP の対象となる）。神戸スタンダードの射程を教養教育に限定したことで、教養教育と学部専門教育のどちらにも含まれない科目が生じてしまったのである¹⁷。こうした科目は、全学 DP 内の神戸スタンダードと直接的に関係しない能力（表3の網掛け部分）に対応していると説明することはできる。しかしながら、そうした三者の構造（神戸スタンダード、神戸スタンダード以外の全学 DP、学部 DP）は複雑であり、学内教職員や学生にも理解が行き届いているわけではない。

第二は、全学レベルの委員会（全学教育推進委員会のもとに設置されている全学評価・FD委員会）で把握しているのは、入学時から在学時、卒業時にわたる神戸スタンダードの達成度であり、教育課程別 DP の達成度については全学的に把握・共有できておらず、部局任せになっているという点である。周知のように、法人評価や認証評価において要求されるのは教育課程別 DP の達成度である。他方、同委員会で把握する神戸スタンダードの達成度は、全学的な教育の内部質保証の観点からは重要でありつつも、対外的にはそれほどアピールできているわけではない。

第三は教養教育改革には未だ課題が山積していることである。2022年7月に出された「教養教育検討ワーキンググループ中間答申」によると、次のような課題が認識されている。①指定されている曜日時限に開講されている科目数が少ない、②基礎教養科目と総合教養科目の区分が必ずしも理念に沿っていない、③すべてクォーター開講になっているため、内容的にセメスター開講がふさわしい科目を実現できない、④神戸スタンダードが示している3つの能力は学士課程教育全体を通じて身につけるべきものであり、教養科目だけで身につけられるものではない、などである。これらに加えて運用上の課題としては、各学

なお、筆者は2015年度～2021年度まで全学評価・FD委員長の職にあり、学内において神戸スタンダードの普及を図る側の立場にあった。

¹⁷ この問題点は神戸スタンダード作成時から関係者の間で共有されていた。そこで、外国語教育や情報教育を網羅した「神戸スタンダードプラス」(案)を策定してはどうかという意見がかつて存在したが、現在は中断している。

部が提供する専門科目の履修を妨げないように、教養科目の履修制限が複雑化しており、学生の履修登録ミスが頻発していること、これを防ぐための事務作業が膨大となっていることなどが挙げられている。したがって、教養科目の理念を再検討した上で、履修制度を簡素化することが喫緊の課題となっている（2022 年 11 月現在、検討中）。

ここからは、教養教育独自の目標を設定したことで、結果的には学士課程教育全体の目標設定と運用が複雑化してしまった現状に対する厳しい認識を読みとることができる。ではこの現状をどうすれば改善できるだろうか。一つの試みとしては、神戸スタンダードと全学 DP を統合して新たな全学 DP として一本化し、この新たな全学 DP の通称を「神戸スタンダード」とする方法が考えられるだろう。これによって、各学部における教育目標と開講科目間の対応関係を明確にする。同時に、これまで全学評価・FD 委員会が各種アンケートを通じて把握してきた神戸スタンダードの達成度確認を、新たな全学 DP＝神戸スタンダードの達成度に漸次切り替える。そして、同委員会が全学 DP と学部 DP の達成度の両方を把握できるようになることが望ましい。

教育目標及びカリキュラム設計の要諦は、学生や教職員にとってシンプルでわかりやすい、かつ無理のない仕組みにすることである。このことが制度の安定化にもつながる。不変の改善のための工夫を重ねることが先人の努力に報いることになると思いたい。

謝辞

各種資料を整理して提供して下さった神戸大学学務課の皆様に深謝申し上げます。

参考文献

- 大野隆（2017）「神戸大学における教養教育の現状と課題－8 年間を振り返る」神戸大学 大学教育推進機構編『大学教育研究』第 26 号、pp. 1-11.
- 葛城浩一（2023）「神戸大学におけるディプロマ・ポリシーの現状と課題」神戸大学 大学教育推進機構編『大学教育研究』第 31 号、pp. 3-23.
- 神戸大学（2022）「教養教育検討ワーキンググループ 中間答申」令和 4 年 7 月 29 日付
神戸大学 大学教育推進委員会 教育改革検討ワーキンググループ（2013, 2014）議事メモ及び資料
- 神戸大学 大学教育推進委員会（2016-2021）議事要録及び資料
- 近田政博（2018）「神戸大学における 2 学期クォーター制導入をめぐる課題」神戸大学 大学教育推進機構編『大学教育研究』第 26 号、pp. 103-118.
- 近田政博（2020）「2 学期クォーター制をどう見直すか－神戸大学内の議論を中心に－」神戸大学 大学教育推進機構編『大学教育研究』第 28 号、pp. 57-70.
- 土橋慶章（2017）「神戸大学の第 3 期中期計画について－数値目標を明示した指標を中心に－」神戸大学 大学教育推進機構編『大学教育研究』第 28 号、pp. 133-143.

神戸大学「国立大学法人神戸大学の中期目標を達成するための計画」（第3期：平成28～33年度）

<https://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/project/plan/medium-plan-goal3-R0304.pdf>

（2022年11月24日最終確認）

神戸大学「中期目標の達成状況報告書」（2020）（第3期分について）

<https://www.kobe-u.ac.jp/documents/info/project/evaluation/2020tassei.pdf>

（2022年11月24日最終確認）